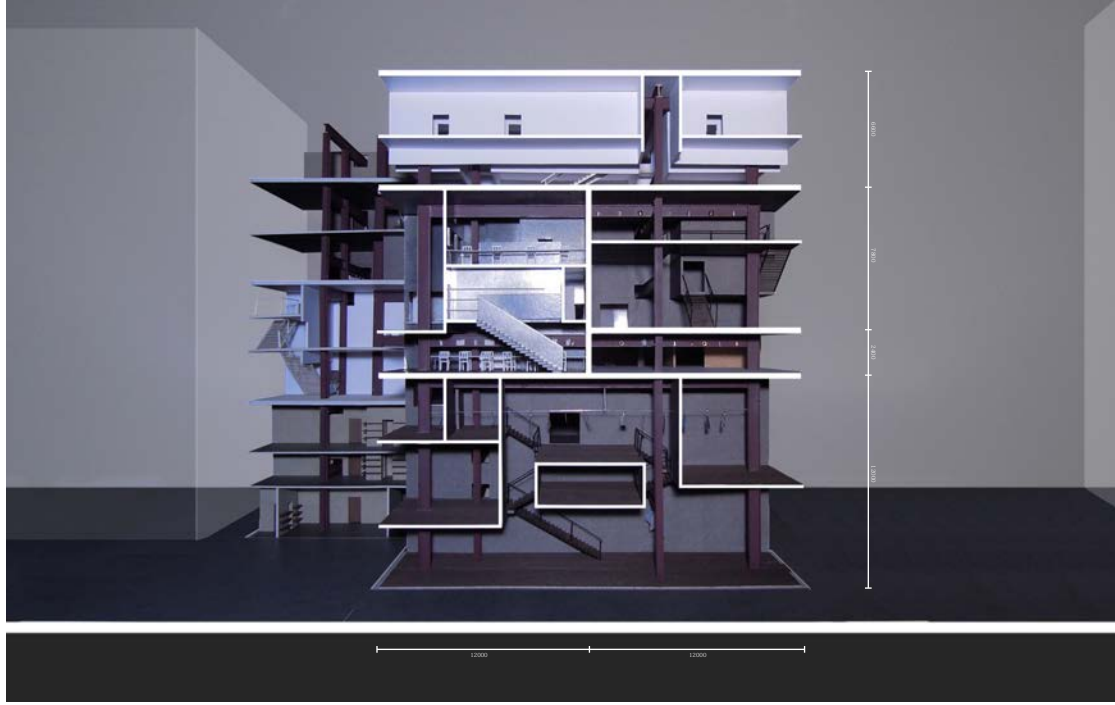


歴史的文脈と商業論理に基づく空間構成

―Adolf Loosの多様性と対立性の抽出を通じて―

「装飾は犯罪である。」 — 誤認された、多様性と対立性の提言。

01_ 研究背景

——第一次世界大戦以後の近代建築、近代デザインにおいてすでに、**ロースの装飾批判は誤解されていた**と言うべきなのだ。—— 田中純

——簡素なファサードと、豪華な堂々としたファサードといった**余りにも対比的な構成**は、近代建築の原理では考えられない構成だ。—— 伊藤哲夫

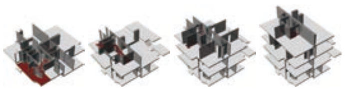
——ロースは異なるタイプの構成文法を同時に使っている。一つの平面、一つの空間に抜き差しならぬ**矛盾・対立**が持ち込まれるのである。—— 川向正人

——さまざまな部屋が**それぞれの使い方にふさわしい規模とテクスチャー**、色調でつくられ、集合している。—— 後藤武

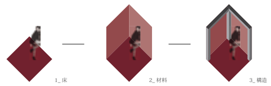
——ロースの建築は**対立性、見かけと実体のずれ**が意識され感じられるように演出されている。—— 岡崎乾二郎

「装飾は犯罪である」。このフレーズにより、ロースは簡潔性におけるモダニズムの先駆けと理解されがちである。しかし、複数の論者が対概念である多様性と対立性がロースの建築に内在すると言及している。そこで本研究では、これらの言説を図面より、具体的な形態と数値を通し、実証した。

02_ ラウムプランと被覆の原則



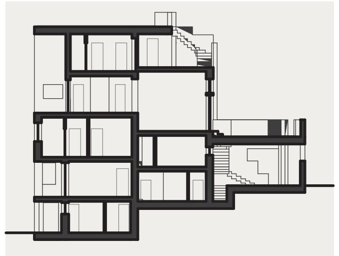
【ラウムプラン】



【被覆の原則】

ロースの空間構成手法として二つの概念がある。
一つ目はラウムプラン。これは大きさが異なる空間を組み合わせ、1つの全体を形成するものである。二つ目は被覆の原則。この概念は、複数の材料を各空間に即して用いるものである。この二つの概念より、ラウムプランによる作品の各空間には空間形態と材料の差異、つまり多様性があると言える。

03_ 多様性と対立性を生み出すラウムプランの３特性



垂直性

- 各空間のフロアレベルや天井高が一定ではない関係性

劇場性

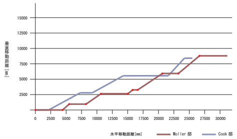
-2つの空間が隣接しながら、直接的な身体関連がなく視覚的関連のみがある関係性

内向性

- 各空間における意識が外部空間ではなく内部空間へと向かう方向性

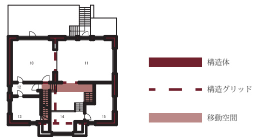
04_ 分析方法

(i) 移動空間の特性



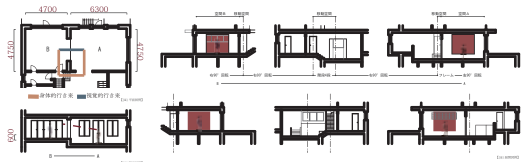
(i) では垂直移動距離と水平移動距離を軸としたグラフを作成する。また、これらを同年代同規模のル・コルビュジェのクック邸と比較することで、ラウムプランの移動空間の特性を明らかにする。

(ii) 各空間の平面形態と移動空間の関係



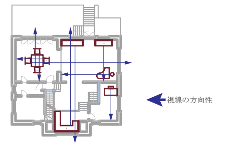
(ii) では平面図に構造グリッドを記述し、各空間の構造グリッドからずれている壁面数、移動空間に接している壁面数を計測する。また、これらもクック邸と比較する。

(iii) 劇場性を持つ空間の形態特性



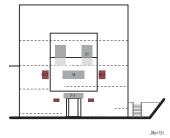
(iii) ではまず表1のことを定義する。
・FLの低い方を空間A、高い方を空間B
・身体要素—空間同士を身体的に行き来する際に体験する建築要素。
・視覚情報要素—空間同士を視覚的に結んだ際に、空間同士の間に存在する建築要素。
これらを考慮し、空間AB間の平面図、断面図、展開図より、身体要素、FLの差、空間形態の差異、視覚情報要素を記述する。

(iv) 家具配置による視線の方向性



(iv) では建物内部のパブリック階平面図における佇むための家具を使用した際の視線を記述し内部の他の空間が見渡せるか、窓から外部が見えるかを記述する。また、窓から外部が見えるもの以外を内向性があると考える。

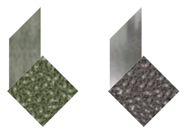
(v) 窓のサイズ



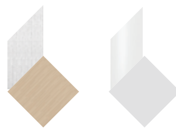
(v) では立面図上の同サイズの窓数を調べる。また、それが内部空間にどのような影響を与えているのかを考察する。

05_ プロジェクト

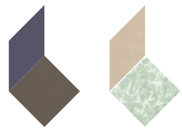
05-01_ 材料と機能を参照した歴史的文脈の可視化 —



【原宿セントラルアパート】



【T's 原宿】

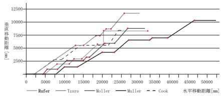


【東急プラザ】

対象敷地は神宮前交差点の北東側角地。当該敷地は戦後から数え現在で３棟目となる建物となっている。時代に合わせるあまり、当該敷地の歴史的文脈は顕在化されずにいる。また、単一構成の建物内部では、各商業ブランドの持つアイデンティティも顕在化されずにいる。そこで、歴史的文脈と商業論理を明確化する建築を目指す。
現在、当該敷地には商業ビルである東急プラザがその材料を特徴としながら存在している。過去にも、それぞれの材料を特徴としながらT's 原宿が商業として、更に過去には原宿セントラルアパートがアトリエ事務所として機能していた。そこで被覆の原則に従い、これら過去の材料と機能を参照しながら、歴史的文脈の多様性を顕在化する。

_分析結果 (i)&(ii)

_垂直性 -(i) 移動空間の特性



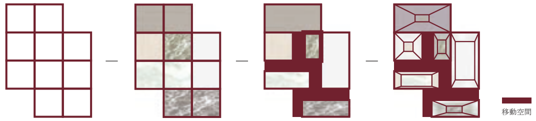
(i) において作成したグラフより対象建築はクック邸と比較すると 4 件中 3 件が垂直移動距離に対し、水平移動距離が大きいことが分かる。これはクック邸と異なり、垂直移動が階高よりも細かく分節され、この間ごとに水平移動が配されているためであると考えられる。つまり、明確な基準階が存在せず、各空間の FL 及び天井高は一定にはならない。このことより、垂直性があることを確認できる。

_(ii) 各空間の平面形態と移動空間の関係

住宅名	部屋数	グリッドからずれている壁面数						移動空間に接している壁面数				
		0	1	2	3	4	平均数	0	1	2	3	平均数
Rufer	19	1	12	5	0	0	1.16	0	16	3	0	1.16
Tzara	25	5	7	12	1	0	1.36	3	18	4	0	1.04
Moller	22	1	3	13	4	1	1.86	2	19	2	1	1.18
Muller	28	6	13	8	1	0	1.14	6	17	4	1	1.00
Cook	14	11	3	0	0	0	0.21	4	11	0	0	0.79

(ii) で作成した表より 4 件すべてにおいて構造グリッドからずれている壁面数と移動空間に接している壁面数の平均値はともにクック邸を上回った。これは、移動空間が上記の特性により構造グリッド内に納まらないためであると考えられる。その結果として、各空間は移動空間に押し出されるかたちで構造グリッドから外れ、各空間独自の平面形態、つまり多様性を得ると言える。また同時に、それぞれが必要な断面形態が規定され断面形態の多様性すなわち垂直性を得ると考えられる。また、(i) と (ii) を合わせると異なる形態と材料によって多様性を得た各空間が、上記の移動空間内において連続的に対比され、対立性が生じていると言える。

05-02_ 移動空間の挿入によるグリッドのずれと垂直性



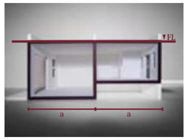
敷地に対し 12m 角グリッドに載せた矩形を配し、その後、1200mm の垂直移動を基本とした移動空間を挿入する。表参道ヒルズ等とは違い、多様性を得た各空間は移動空間内において連続的に対比され、対立性を得ることで当該敷地のアイデンティティが顕在化していく。

_分析結果 (iii)

_劇場性 -(iii) 劇場性を持つ空間の形態特性

住宅名	身体要素の空間分化	FLの差[mm]	同一の天井ライン	同一の幅または奥行き	視覚情報要素
Rufer	有	970	有		プロセニアムアーチ型開口部
Tzara	有	1280	有	有	プロセニアムアーチ型開口部
Moller	有	600	有	有	プロセニアムアーチ型開口部
Muller	有	1200	有	有	プロセニアムアーチ型開口部

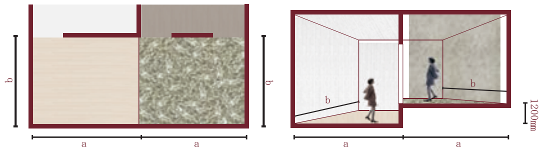
(iii) で作成した表より、身体要素においては展開図より空間 AB 間を分割する建築要素が 4 件すべてに見られた。また、FL の差は断面図より最低が 600mm であり、最高が 1280mm だと分かった。最小である 600mm は身体的には直接行き来することができない値である。最大である 1280mm は空間 A からでも空間 B の床面と奥の壁が見渡せる値である。つまり、空間 AB は視覚的に両空間を一度に理解できる。これらのことより、空間 AB には劇場性があること



空間形態の差異においては平面図と断面図より 4 件すべてにおいて空間 AB の天井のラインが揃っており、3 件において空間 AB の幅または奥行が近い値であることが分かった。空間形態の多様性について前述したが、劇場性を持つ空間に関しては天井ライン、奥行き、幅など複数の形態を揃えることにより、材料の差異を際立たせ、その対立性を強めていると考えられる。

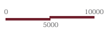
視覚情報要素においては展開図より空間 AB 間の開口部は 4 件すべてにおいて劇場形式はプロセニウムアーチ形式であることが分かった。この劇場形式は空間間の異質性を積極的に利用する形式である。つまり、この形式により前述したすべての差異は際立ち、空間 AB は極めて強い対立性を得ると考えられる。

05-04_ 劇場性による対立性

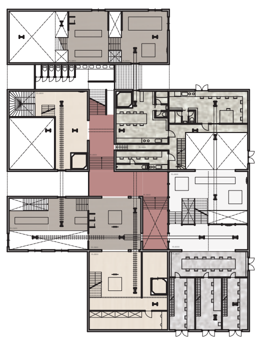


各空間内部は鉄骨フレームによる支持ではなく、壁構造とすることで各空間はそれぞれに適した形態をとることができる。多様性を得た各空間に劇場性を付加し、歴史的文脈、ブランド・アイデンティティを明確化する。

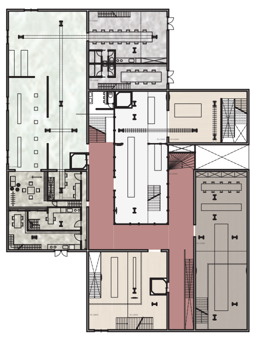
_平面図 1/300



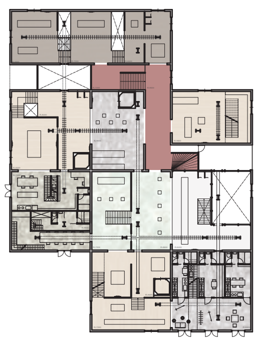
_GL±0=FL±0[mm]



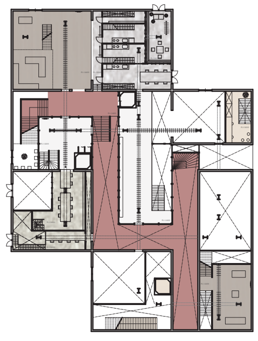
_FL=3000-6600[mm]



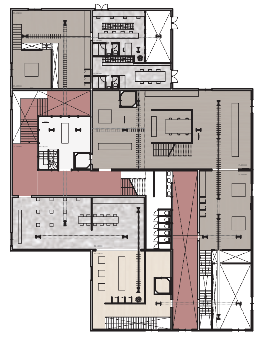
_FL=10200-13800[mm]



_FL=6600-10200[mm]



_FL=13800-17400[mm]



_FL=17400-21000[mm]

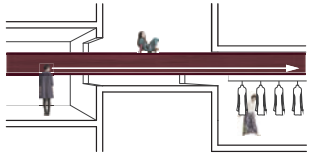
_分析結果 (iv)

_内向性 -(iv) 家具配置による視線の方向性

住宅名	全家具数	内向性のある家具数	内向性のある家具数の割合	他空間可視の割合
Rufer	10	8	80.0%	12.5%
Tzara	19	12	63.2%	41.7%
Moller	9	8	88.9%	37.5%
Muller	22	19	86.4%	26.3%
合計値	60	47	78.3%	29.8%

(iv) で作成した表より内向性がある家具配置の割合は 78.3%であったので、内向性が高いことが伺える。また、この中の約 30%が内部の他の空間が見渡せることから各空間における意識は他空間へと向かう場合もある。

05-03_ 構造的家具の内向性による対立性



【構造的家具断面ダイアグラム】

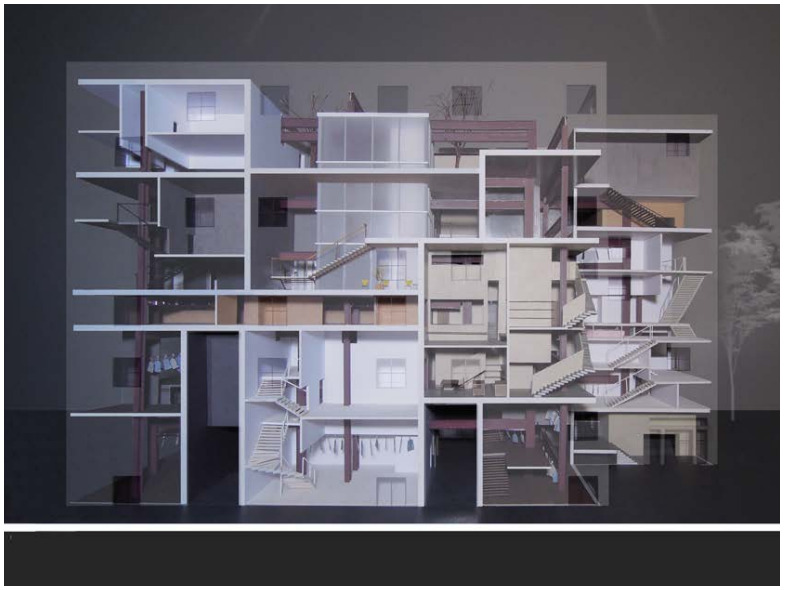
構造的家具としての鉄骨フレームを挿入する。各空間は垂直性を得ているため、このフレームはある空間ではスラブを支え、他の空間ではスラブを支えない代わりに家具となる。また、壁に鉄骨のための開口部を設けることで棚等として使用された際の視線の方向性により各空間は内向性を得る。さらに視線だけでなく音なども他空間に伝わり、ロースの模倣では実現し得ない、商業空間としての賑わいが内部で伝達していく。

_分析結果 (v)

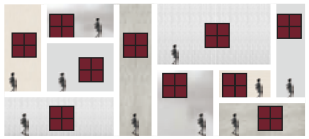
_内向性 - (v) 窓のサイズ

住宅名	全窓数	同サイズの窓数	同サイズの窓数の割合
Rufer	22	3	13.6%
Tzara	27	10	37.0%
Moller	33	13	39.4%
Muller	32	21	65.6%
合計値	114	47	41.2%

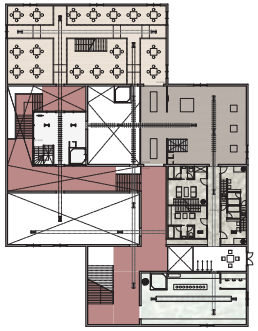
(v) で作成した表より、同サイズの窓が全体の 41.2%であることが分かった。窓は空間構成要素の一つであり、同サイズの窓を配された各空間は内部環境の取り入れ方が類似する。また、ル・コルビュジェの「ロースの窓は外部の装飾のためではない」という言説を踏まえれば、ロースの同サイズの窓は内部空間の形態と材料の差異を際立たせ、その対立性を強めていると考えられる。



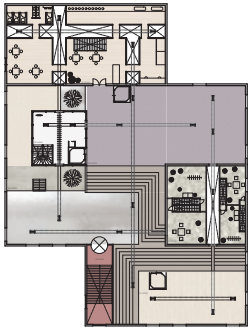
05-05_ 同サイズの窓による対立性



各空間に同サイズの窓を配する。
同サイズの窓が各空間の形態、歴史的材料、商品の差異を強調することで、歴史的文脈とブランド・アイデンティティが明確化していく。

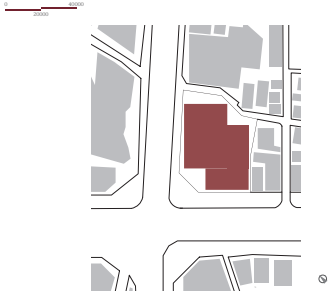


_FL=21000-24000[mm]



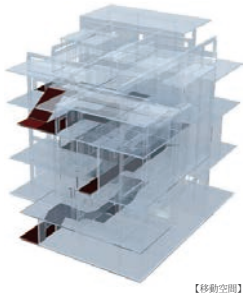
_FL=24000-27600[mm]

_配置図 1/1500

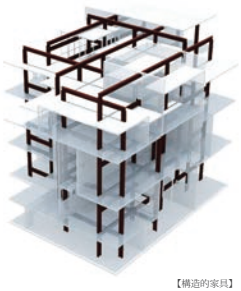


_断面図 1/300

_アクソメ図



【移動空間】



【構造的家具】